



国連広報センター所長

根本 かおる

国連75周年も多国間主義にはころび

国連は20世紀前半に二度にわたる世界大戦を引き起こしてしまったことへの猛省の中から、1945年10月24日に国連憲章が発効し、産声を上げた。10月24日は「国連デー」として世界中で記念行事が行われる。今年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的大流行という試練に直面する中で、国連創設から75周年という節目の誕生日を迎える。

9月下旬の国連総会ハイレベル・ウィークは、COVID-19の影響で初のバーチャル開催となった。世界の首脳が国連本部のあるニューヨークに集結し、国連の会場で演説合戦を行い、時に火花を散らし、多

未来を 変える

くの「国間会談をこなし、相手と直接掛け合う」といういつもの光景はなかった。本場の意味での国連外交の醍醐味の点では物足りなさはあったが、ビデオメッセージという形ではあるものの例年以上に多くの首脳が総会の一般討論演説を行った。菅義偉首相の初の国連総会演説もビデオでのスピーチとなった。

首相就任後の国連総会デビューとなったこのスピーチの「過去75年間、多国間主義は、課題に直面する度、強くなり、進化してきました」という冒頭の言葉は、多国間主義のほころびや米中対立が目立つ今日の国際情勢に胸を痛めてきた立場として非常に沁み入るものだった。演説は、持続可能な開発目標（SDGs）の推進やその「誰一人取り残さない」という大原則と、日本が長年推進してきた一人一人に着目する「人間の安全保障」の理念に立脚するものだ。COVID-19対策をはじめ、「誰の健康も取り残さない」を目標とした国際保健分野、経

今こそ国際協力・協調の強化を

済協力、平和と安全、国連のガバナンス強化、法の支配、軍縮など網羅的に、日本の強い決意を印象づけるバランスの取れた内容であった。特に新しい首相が表明した国際協調・多国間主義への強いコミットメントには勇気づけられた。

国連が創設75周年を機に今年初めから世界中で展開してきた「グローバル対話」で吸い上げた100万人以上の声の9割近くが、「世界の課題の解決には国際協力が不可欠」と支持している。国際協力と国際協調の強化が今こそ求められている。しかしながら、米

国調査会社による国連への支持と評価に関する14カ国調査で、日本が突出して低く最下位となった。大國間の対立が目立つ中、日本を含む第三極にこそ国連の場を活用して指導力を発揮することが期待され、機会があるということを手際よく説明していきたい。

昨年お亡くなりになった緒方貞子氏のご存命だったならば、どのように知恵を絞り、アクションを起こしただろうかと考えることが



国連総会でオンライン演説する菅義偉首相（9月26日）(c)UN Photo/Loey Felipe

日本、問われる指導力

多い。緒方氏は10年に及ぶ国連難民高等弁務官としての経験から、「恐怖からの自由、欠乏からの自由」との深い国連の高官らが登壇人間を中心に据えた安全保障概念を国連の場で提唱した。その緒方氏を追悼するメモリアルシンポジウムが、まさに国連デーの10月24日に東京都内の上智大学

ねもと・かおる 86年（昭61）東大法卒、同年テレビ朝日入社。米コロンビア大学大学院国際関係論修士修了。96年から国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）で難民支援活動に従事。世界食糧計画（WFP）広報官、国連UNHCR協会事務局長なども歴任。13年から現職。神戸市出身。